

日銀の視点

最近、「今回の景気回復・拡大は、バブル期を抜いて戦後3番目の長さ」という内容の報道を目にします。これは、国内閣府)が設定する「景気基準日付」(景気循環の「山」や「谷」のこと)です。今回は2012年11月が景気の谷でしたので、翌12月からの景気拡張期間が今年の3月までで52カ月となり、バブル期(51カ月)を上回るという意味です。バブル期のような高揚感や過熱感はありませんが、息の長い着実な景気回復・拡大が続いています。

日銀水戸事務所長 桑原 康二

れる形で、13年5月から景気回復が始まっています。データが存在する1976年以降(国のデータは51年以降)でみると、景気拡張期間が今年の7月まで続くと、バブル期(50カ月)を抜き、戦後2番目の長さになる計算です。

ふと思いました。私も水戸事務所では、毎月、景気動向を

「横ばい圏内の動きとなっている」と判断を改善させています。その数カ月後には、「足もと、持ち直しの動きがみられる」と判断をさらに上方修正しています。景気の転換点をリアルタイムでおおむね正確に捉えていたといえると思います。

景気の潮目をリアルタイムで捉える作業は、必ずしも簡単で

の力量・センスも問われます(ちなみに、当時の景気判断を担当した事務所長は、現在、民間シンクタンクでチーフエコノミストとして活躍されています)。

私どもは、当県の景気の先行きについて、「海外経済の改善を背景として、緩やかながらも回復のテンポを強めていくとみられる」と判断して

「冷静に」景気動向分析

ます。当県の発展に貢献したいという「いばらき愛」を抱きつつも、

分析し、「茨城県金融経済概況」を公表していますが、結果的に景気の転換点を的確に捉えていたのだからか。ちよっとドキドキしながら、当時の資料を振り返ってみました。

景気の総括判断をみると、当県の景気の谷である13年4月までは「弱い動きとなっている」との判断でしたが、翌5月には

はありません。景気の家・谷が設定されるのは、1年以上が経過した後です。多くの場合、最新のデータはリアルタイムでなく、翌月以降に判明します。

このため、利用可能なデータに企業や金融機関へのヒアリング情報などを加味しつつ、毎月の分析・判断を行うこととなります。エコノミストとして

「予断を持たず、冷静に、客観的に」景気動向を分析していきたいと思えます。短観調査やヒアリングをお願いしている企業の皆さまには、ご負担をおかけしますが、的確な判断のためにも、引き続きご協力をお願い申し上げます。

(第2土曜掲載)